



～2学期始業式 学校長講話～

おはようございます。

今日から、2学期となります。

共通テストまで100日を切り、6年生は、自分の進路実現に向けての最終スケジュールの調整に余念がないことでしょう。

1年生から5年生は、今週末の文化芸術発表会に向けての仕上げに入っていることかと思えます。

また、模擬試験により自分の学習の成果ややり方を振り返る機会も増え、様々なことを自分で調整しながら、最大限の効果を上げる生活の仕方、学び方を実践する時期でもあります。

世の中では、ノーベル賞週間が終わりました。

新潟日報のコラムを見ると、今年のノーベル賞は、賞を与える側のメッセージが色濃く表れているといっています。

それは、「地球規模の諸課題を、人類の英知で解決せねばならないという思い」です。物理学賞を受賞した真鍋淑郎氏の気候解析の基礎理論の研究は、今から半世紀以上も前のものです。異常気象、地球温暖化の問題が喫緊の課題となる中での受賞でした。文学賞は、タンザニアのアブドゥルラザク・グルナ氏です。彼の作品は、植民地支配から独立した後の動乱を生き抜き、難民として英国に渡った経験をもとに、世界の難民問題をテーマとした作品を執筆しています。

昨日発表された経済学賞は、米カリフォルニア大バークリー校のデビッド・カード教授、米マサチューセッツ工科大のジョシュア・アングリスト教授、米スタンフォード大のグイド・インベンス教授の3氏です。経済格差が世界的な問題となる中、最低賃金の理論についての研究が評価されました。最低賃金を上げると雇用が減ると思われるが、そうではないことを理論的に解明したとのことでした。

今、紹介した3つの賞にかぎらず、ノーベル賞は、まさに、世界を変える、世界を変えた、人類の英知の象徴ともいえる賞であるといえるでしょう。

ただ、私が、少し気になったのは、真鍋氏は日本人でありながら、アメリカで研究をしています。グルナ氏の作品は、日本語での翻訳がないとのことでした。日本は、世界の動きについていっているのだろうか？

日本では、世界を変え、社会をよりよくするための基盤となるウェルビーイングやSDGsなどの価値意識が十分に浸透しているのだろうか？ ととても気になります。

日本の最高学府である大学は、専門的な学びを深め、確かで豊かな力を身につけ、社会に出て、それをよりよく変えるための場所です。そこで学ぶためには、例えば学校の授業を通して、基礎学問を確かに身につけ、より高次の学問を理解できるための基盤を養うことが不可欠です。

また、総合・探究やSDGs等の学びの中で、何のために学ぶのか、解決すべき課題はなんなのかという世界や社会の動きや状況について知ることにも不可欠です。さらに、学ぶための方法や学んだことや考えたことを発信し、仲間に伝えたり、異なる考えの人と議論する力も必要です。文芸会をはじめとする行事活動や生徒会活動は、そのための力を養う場でもあります。

一日一日、一つ一つの授業や活動、模試などの場面の自分にとっての目的、位置づけを明確にして、充実した学びを積み重ね、希望する大学に進むことのできる基礎学力、世界を変える確かな力を培ってほしいと思います。

最後に、ノーベル賞の受賞者のスピーチから、強く感じることは、学ぶことの楽しさ、喜びを実感できるものだけが世界を変える影響力をもつのだということなのです。

2学期、皆さん一人ひとりが、学ぶ喜びを実感・納得できる学校生活を送ることを期待しています。

～今週の土曜(10月16日)は文化芸術発表会です～



↑各クラスや有志による作品紹介ポスター



令和3年文化芸術発表会 スローガン

響

～ひびき～

- 感動させる 影響を及ぼす
- 共鳴する こだまする
- 評判が伝わる 広く聞こえわたる